

A vertical red braided cord with a knot at the top, running down the left side of the page.

悠久の歴史伝える

八軒家

はじめに

この冊子は従来、八軒家を起点とする熊野への名所案内としていましたが、今回新たに、江戸から八軒家までつらなる東海道・京街道について、大阪城天守閣 北川中央館長（二〇一八年）に加筆いただきました。天皇退位・即位の時代の節目に、天皇所縁の地をめぐるガイドとしてもお楽しみいただけると期待しています。



難波津

この辺りは、上町台地の先端で、縄文時代は台地より東側は生駒山麓まで（河内潟）と呼ばれた内海で、（チヌの海）と呼ばれた大阪湾とは上町台地の先端でつながり、潮の流れが速く、ここから（浪速）の呼び名が生まれたといわれる。

弥生時代には海退と淀川と大和川の堆積で（河内潟）は（河内湖）から（河内平野）になり、仁徳天皇が淀川と大和川の合流地を改修しこの辺りは（難波堀江）と呼ばれた。古代の国際交流の港（難波津）の発祥地である。

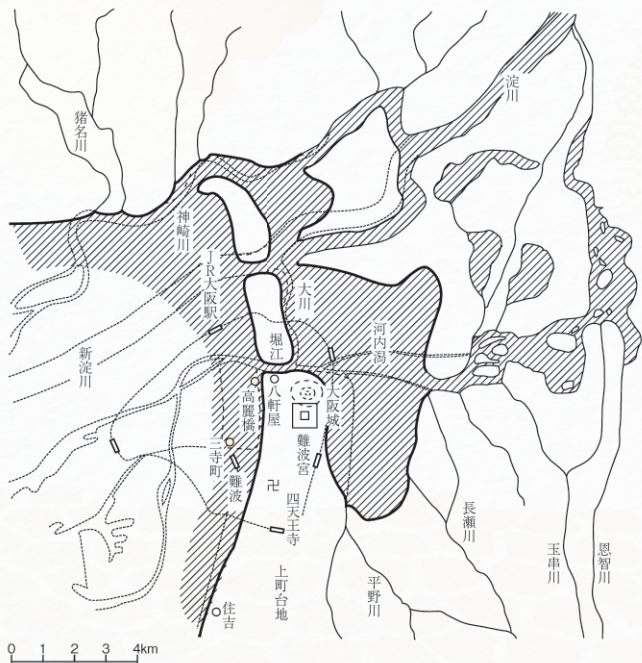
飛鳥、奈良時代には国際交易も盛んで（難波堀江）の兩岸には寺や貴族の荘が集まり、倉が建ち並び、また外国使節のための客館（難波館）の施設があった。行基がかけた（難波ノ橋）もこの辺りにあった。

平安時代には（渡辺ノ津）と呼ばれ、紀州熊野詣での上陸地であった。豊臣時代に天神橋・天満橋がかけられた。

江戸時代には（八軒家）と呼ばれ、淀川を上り下りの三十石船の発着場で賑わった場所である。

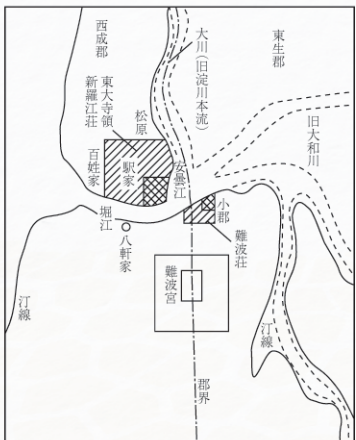
五世紀頃の河内瀧

梶山彦太郎・市原実著 「大阪平野のおいたち」より



新羅江荘と難波荘の位置

直木孝次郎編 柴原永遠男著 「クラと古代王権」より





八軒家の歴史

牧村 史陽

いま天神橋・天満橋のかかっている大川は、古く仁徳天皇のときに掘られた難波なにわノ堀江のことです。「万葉集」には、この堀江川を松浦船や伊豆手船などという大きな船がさかのぼって難波ノ宮に集まってくるさまがたくさんうたわれています。つまりこの地は、御津・住吉すみのえノ津とともに、当時の港だったわけです。

この南側の断崖の上を榎ノ岸といい、そこに坐摩神社がまつられていました。坐摩は「いがすり」とよみ、泉の神をまつたものですが、のちに豊臣秀吉が大坂築城のとき、いまの東区渡辺町（現・中央区久太郎町）へ移転させたのです。石町いしくまちにある坐摩神社のお旅所はそのあとを残すもので、神功皇后の腰掛け石というものが伝えられ、石町の名もその石から出たものといわれています。

平安朝時代には、ここを「渡辺」と呼ばれていました。向かい側へ渡る渡し場の意味ですが、また窪津くぼつの名も伝わっています。「国府津こくうづ」のなまりで、そのころここに国府があり和氣ノ清磨が摂津職しよ（摂津ノ国の長官）となってここを管轄していたこともありす。摂津とは「津を摂すべる（支配する）」という意味で、津は港のこと、すなわち摂津の国名もこの地からおこったと見るべきでしょう。

渡の辺や大江の岸にやどりして

雲井に見ゆる生駒山かな

能因法師

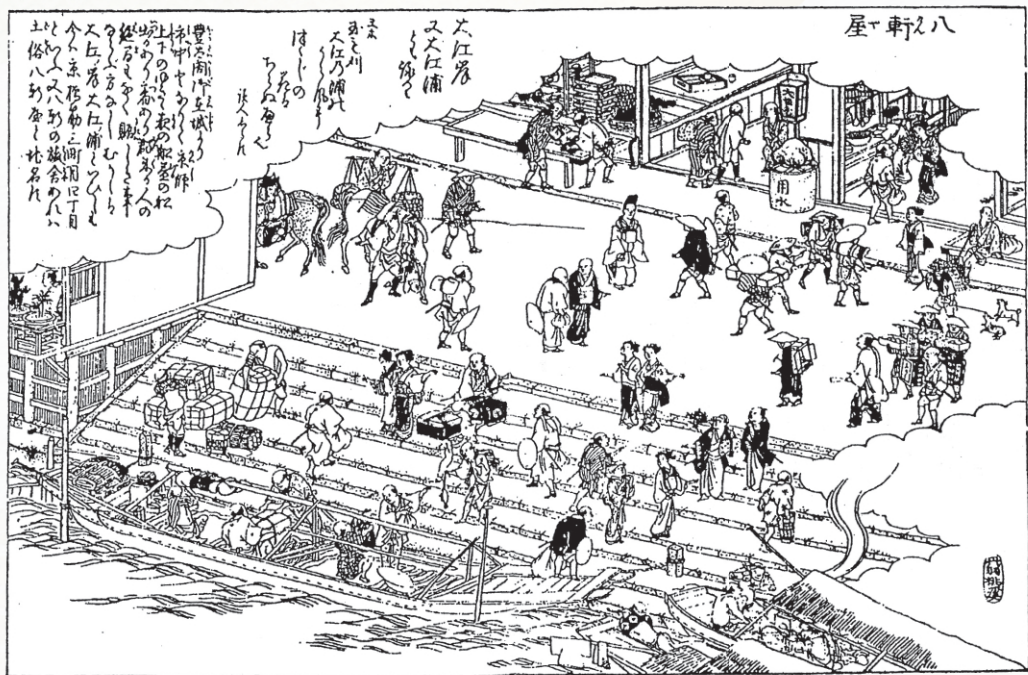
この大江の岸とは、渡辺からおこってはるかに生玉・天王寺へとつづく高台の西側の断崖の総称です。（7ページへ）

八軒屋

秋里籬島文 竹原信繁画

「摂津名所図会」より(安政二年一八五五年)

八軒家に、京都から三十石船が到着し、乗り合い客や積荷の下船の様子が描かれている。船着場の石段には、旅籠の客引き女や物売り男なども出迎えている。



八軒屋

大江落
又大江浦
〜〜街?

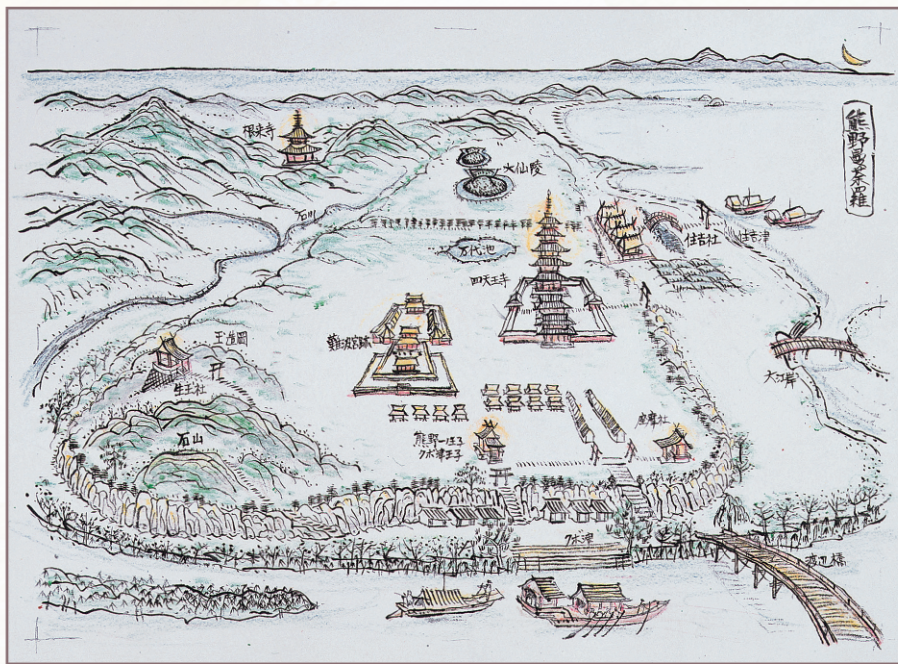
まよ
よと川
大江乃浦此
はしとの
ちのち
はんとん

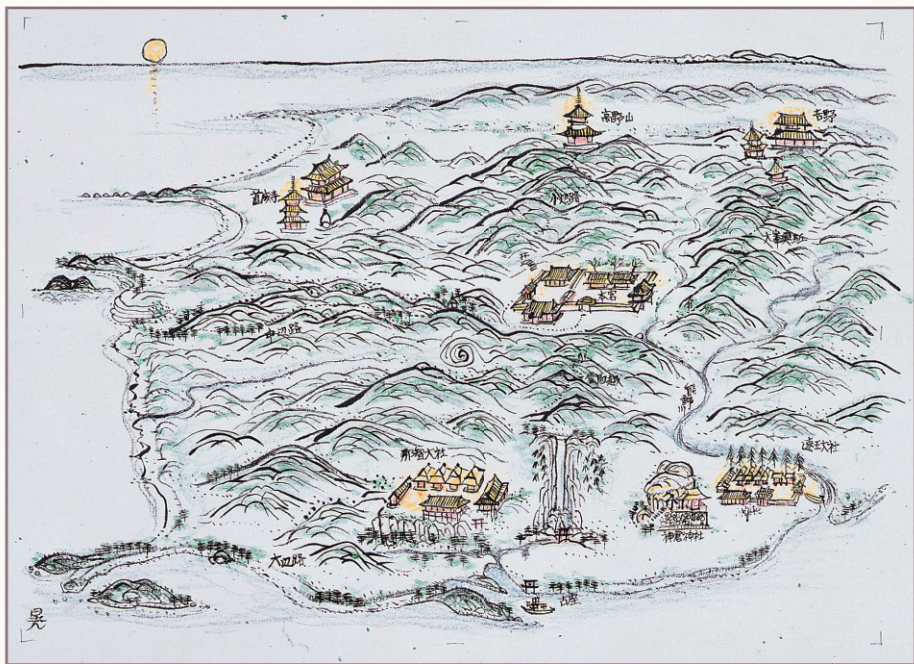
豊前守(五城)の
本陣(ヤウ)の
上下の(ゆ)の(お)の(船)の(室)の(松)
城(の)か(う)の(お)の(船)の(室)の(松)
の(お)の(お)の(お)の(お)の(お)の(お)
又(江)落(大)江(浦)と(い)ふ(は)ら
今(い)ま(は)の(お)の(お)の(お)の(お)の(お)
土(と)俗(ぞく)八(は)軒(けん)と(い)ふ(は)ら

熊野古道曼荼羅 久保田晃画

「浪華往古図」より

「浪華往古図」は、中世の浪華の地が画かれた貴重な古地図である。元図の製作年代は室町時代初期(十四から十五世紀初)と伝えられ、それを月岡丹下という画工が、江戸時代末頃、写図したものと付記されている。今の御祓筋の辺りに渡辺橋が描かれ、それから上町台地の上に熊野ノ王子が在り道は直線に南下して四天王寺に至る。さらに道は南下し二ノ王子が阿倍野に在り熊野道と記されている。大坂城や石山本願寺は無く、石山と記されている。





この熊野古道曼荼羅絵は、前図を参考にしてさらに年代をさかのぼり、平安末期から鎌倉時代初期(十二から十三世紀初)の頃、後白河上皇や後鳥羽上皇と定家たちが熊野御幸した時代の浪華を想像して描きました。

京都から淀川を船で下って天王寺・住吉・高野、あるいは遠く紀州熊野へおまいりする皇族や公家たちは、みなこの渡辺から上陸して、上町台地を南へと道をとってゆきました。そうした関係から、やがてこの津がしらに渡辺王子（また窪津王子）がまつられることになりました。熊野九十九力所の第一王子で、それから熊野街道（いまの阿倍野街道）を、日数をかさねて熊野までの旅をつづけたものです。この渡辺王子のちに四天王寺西門前に移されましたが、明治中期に廃絶しました。その第二王子が、いまでも阿倍王子神社として残っています。

渡辺橋はいつごろできたものかはつきりしません。「元亨釈書」に、聖武天皇の天平十七年、行基が難波ノ橋をかけたというのがこれにあたると思いますが、その後洪水のためしばしば流されてはかけえられたことだろうと想像されます。その何度目かの渡辺橋の渡りぞめのとき、遠藤武者盛遠もりとおがその橋奉行をつとめて、袈裟御前を見そめたのが、あの『地獄門』の話の発端ともなっています。

天神橋・天満橋がかけられたのは、ずつとのちの豊臣時代のことです。徳川時代になってそれに難波橋が加えられ、大阪の三大橋としていまなお人々に親しまれています。

八軒家の名は、ここに八軒の船宿や飛脚屋があったことから出たものだといわれています。十返舎一九の『膝栗毛』で知られる弥次さん・北さんが大坂への上陸第一歩を印したのもこの八軒家ですし、森ノ石松の「すし食いねえ」の話もここに設定せられているなど、八軒家は千数百年の間何かと話題の絶えないところであります。

八軒屋夕景 歌川國員画

船着場の石段の先に、石垣の築地が出来て間が板敷きになっている。天神橋の向こうは夕焼けの六甲山系か。

〔浪華百景〕より（安政年間）



三大橋 歌川國員画

天満橋・天神橋・難波橋は、浪花の三大橋といわれた。八軒家の船着場と釣鐘屋敷の彼方に大坂城の乾の矢倉が望まれ、そして生駒山系にのぼる輝ける朝日。

〔浪花百景〕より



この地は江戸時代には八軒家と
稱し淀川を上り下りの三十石船
の発着場として さらに古くは
渡辺といい紀伊熊野詣での旅人
の上陸地として栄えた また大
江山の鬼を退治したといわれる
渡辺綱はこの地を支配した横津
源氏一族の出身であり『地獄門』
で知られる遠藤盛遠が袈裟師前
を見初めたのもここに架けられ
た渡辺橋の渡りぞめの時のこと
と伝える 楠正行がこの橋から
なだれ落ちる散兵を救いあげ衣
料を与えて國へ帰してやつたと
いう美談は明治初年わが國が万
國赤十字に加盟のとき伝えられ
て感銘を与えた

昭和四十年五月

牧村史陽識

八軒屋着船の図 歌川広重画

「浪花名所図会」より(天保五年、八三四年)

江戸時代、天満八軒家船着場に京と大坂を往来する三十石船が着いた様子です。三十人程の客を乗せ京の伏見を夜半に出て、翌日早朝に八軒家に着きました。上りは下りの倍の十二時間ほどの船旅でした。



永田屋本店蔵



熊野への道

久保田 晃

熊野詣は修験道の行者達が開祖でしょう。

熊野詣の皇族や公家の先駆けは、平安初期の九〇七年真言宗の神仏習合の山岳宗教に信仰のあつい宇多上皇の御幸でした。

それから八十五年後の九九二年に、やんごとなき出家をされて歌芸に秀でた花山上皇の御幸がありました。

さらに約百年を経て一〇九〇年から本格的な恒例の熊野詣が、白河上皇から始まります。

それは白河上皇九回、鳥羽上皇二十一回、崇徳上皇一回、後白河上皇三十四回、後鳥羽上皇二十八回、土御門上皇二回、後嵯峨上皇三回、龜山上皇一回と続きました。

ほぼ一月の旅程と莫大な費用を要した上皇の熊野詣は皇室が富と権力を持った院政時代の終焉とともに終わりました。

熊野は皇室のあつい信仰は失いましたが、鎌倉、室町、江戸幕府と続く権力者達が信仰を受け継ぎますが、熊野詣の主体は一般庶民の路に途切れることの無い参詣者になります。「蟻の熊野詣」といわれた所以でしょう。

平安時代からの熊野詣は、京を出発し下鳥羽から船で淀川を下り、渡辺の津と当時いわれたこの辺り(後の八軒家)で上陸し、熊野九十九王子をたどり、遙かな旅を続けました。

その第一王子が窪津王子(又渡辺王子)で、今は坐摩神社お旅所に合祀されています。

お参りしたあと上町台地を、西に難波の海を見ながら南への紀伊路をたどります。



那智参詣曼茶羅

(部分 國學院大學図書館蔵 室町時代)

熊野那智大社の境内で、熊野三山巡礼を創始したと伝えられる
花山法皇が社僧と対面する熊野行幸の様子。



熊野参詣道 九十九王子と熊野への道
海部要三・多賀子著「熊野古道」より



窪津王子

久保田晃

熊野の神は、熊野権現です。それは熊野の山水に宿る神であり、一方では極楽浄土をおさめる阿弥陀如来が姿を変えた権現である。現世と来世にわたって幸福を授ける神仏習合されたおらかな国風化された神です。

熊野九十九王子の王子は、熊野権現の御子神で、そこは熊野権現の遙拝所であり、熊野への道しるべであり、休憩の場でもありました。

紀伊路の第一王子がここ窪津王子でした。

後鳥羽上皇の御幸の時、供奉した藤原定家が日記「明月記」の抄「熊野御幸記」の中で、窪津で上陸して、先ず窪津王子社での奉幣と行事の様子が記されている。

予、最前の船に乗りて下る。衣裳を解きて一寝に及ぶ（水干浄衣を著く）。申の始許りに、クボ津に著く（先達、次第に触れ申すべきの由、先約。相具せざるに依る）王子を拝す。人々前後に会合。良々久しくして御船着く。御奉幣（長房之を取りて授け参らす。先達之を進む）。御拝二度。

先達これを申して退出。御経供養に候す。里神楽了りて上下乱舞す。宿老の人々、已前に退出。即ち騎馬して馳せ赴く。先陣坂口の王子に参ず。又前の儀の如し。又先陣、コウトの王子に参ず。又前の儀の如し。又先陣、天王寺に参ず。

熊野へ参らんと思へども
からより参れば道遠し

まゝ来て
山崎し

馬に
参れば

若作
成守

空より
参らん

羽を
賜へ

若王子

謀歴秘抄

窪津王子

京都を出発した熊野詣の一行は淀川を船で下りて摂津の園大坂・天満の八軒家に上陸した。そこでこは熊野往還の基地として大層栄え、ここに空経津王子があり、王子社の第一番である渡辺橋があったので渡辺王子ともい、昔国府があったところとしてワラガクボツになったともいっ

郡戸王子

上野王子

阿倍野王子

津守王子





熊野三山

北川 央

本宮・新宮・那智を総称して「熊野三山」と呼ぶ。本宮は家津御子大神、新宮は熊野速玉大神、那智は熊野夫須美大神をそれぞれ主祭神とし、家津御子大神は素盞鳴尊、熊野速玉大神は伊弉諾尊、熊野夫須美大神は伊弉冉尊であるとも説明される。

現在、本宮は熊野本宮大社、新宮は熊野速玉大社、那智は熊野那智大社と青岸渡寺になっているが、江戸時代までは三山とも神仏習合で、家津御子大神は阿弥陀如来、熊野速玉大神は薬師如来、熊野夫須美大神は千手観音菩薩が本地仏とされた。

平安時代後期の院政期には上皇たちが何度も熊野三山への参詣を繰り返し、室町時代には「蟻の熊野詣」といわれるくらい多くの庶民も熊野三山を訪れた。

当時、多くの霊山・霊場が女人禁制を布いたが、その中であつて、熊野三山は女性の参詣を受け入れた。歌人として知られる和泉式部が熊野詣に出かけ、本宮を目前にした伏拝王子まで来たときに月経が始まった。不浄の身となった式部が、女人の身の不幸を嘆き、「晴れやらぬ 身のうき雲の たなびきて 月のさはりと なるぞかなしき」と詠むと、熊野権現が「もろともに 塵にまじはる 神なれば 月のさはりも なにかくるしき」と返したという（『風雅和歌集』）。

また時宗の宗祖一遍は念仏札を配り、わずかな喜捨を得ながら各地を遍歴したが、熊野に向かう途中で、一人の僧侶に出会った。その僧侶が、念仏を信心する心が湧かないと言い、念仏札の受け取

りを拒否したことで、一遍は宗教上の深い苦悩に陥った。すると熊野権現が現れ、「信不信をえらばず、浄不浄をきらわず、その札をくばるべし」と諭したと伝えられる(『一遍上人絵伝』)。

「信不信をえらばず、浄不浄をきらわず」、どんな人々も受け容れる熊野の「廣大慈悲」(『梁塵秘抄』)が多くの人々を熊野三山へと引き寄せたのである。

〈参考文献〉

『熊野詣』

五来重著

「浄土信仰の聖地―四天王寺、そして遙かなる熊野」(大阪人)五八一―九……北川央著

熊野本宮大社

熊野本宮大社は古くは「証誠殿」と呼ばれ、大斎原に鎮座したが、明治二十二年(一八八九)の水害で社殿が流失し、同二十四年に現社地に遷座・再建された。



熊野速玉大社

熊野権現は初め近くの神倉山(神倉神社)のゴトビキ岩に降臨し、その後現社地に真新しい社殿を建て権現を迎えたと伝えられ、一般に「新宮」と呼ばれる。およそ二〇〇点もの古神宝類(国宝)が伝来する。

熊野那智大社

高さ一三三メートル、日本一の落差で知られる那智の滝(一の滝)は熊野那智大社の別宮飛瀧神社の御神体。熊野那智大社の隣には西国三十三ヶ所観音霊場の第一番札所として名高い青岸渡寺(旧如意輪堂)がある。



写真提供: 熊野那智大社



「京街道」の誕生

北川 央

天正十年（一五八二）六月二日、京都・本能寺に宿泊していた織田信長を明智光秀が襲い、信長は天下統一を果たすことなく、非業の死を遂げた。当時、羽柴（のち豊臣）秀吉は、備中高松城を水攻めしていたが、主君横死の悲報を受けて、すぐに毛利氏と講和をまとめ、急ぎ上方へと取って返した。同年六月十三日の山崎合戦で明智光秀を破って主君の仇を報じた秀吉は、翌天正十一年四月二十一日の賤ヶ岳合戦で、信長後継者レースのライバルであった柴田勝家をも破り、同年九月一日から天下統一の拠点として大坂城の築城を開始した。天正十三年七月十一日、秀吉は朝廷から関白に任ぜられ、翌年二月、京都に聚楽第の建設を開始する。天正十八年、秀吉はついに全国統一を果たすが、翌年関白職を甥の秀次に譲った。太閤となった秀吉は、聚楽第を秀次に譲り、新たに伏見城の築城に着手する。こうして、豊臣政権は大坂城・聚楽第・伏見城の三ヶ所を拠点とするようになった。

ところが、文禄四年（一五九五）六月七日、畿内一帯を豪雨が襲い、淀川が氾濫して、北河内一帯から大坂城近傍まで大洪水に見舞われ、京都・伏見と大坂の間が完全に寸断された。事態を重く見た秀吉は、翌年、淀川両岸に強固な堤を築き、概ね現在の流路に固定させた。工事は、河内国側の淀川左岸を東国大名、摂津国側の右岸を西国大名が担当した。このとき築かれた堤がいわゆる「文禄堤」で、左岸の河内堤の堤防上は京都・伏見と大坂を結ぶハイウェイとして活用された。これが「京街道」である。

〈参考文献〉

「水を治めた人々 其の一 豊臣秀吉」(Leve you you「五〇」)……………北川央著
「大坂城と大坂の陣―その史実伝承」……………北川央著



三條大橋 歌川広重画



京橋 芳雪画





「京街道」と「東海道」

北川 央

戦国の世に終止符を打ち、全国統一を果たした豊臣秀吉は、慶長三年（一九八）八月十八日に、六十二年にわたる波瀾の生涯を終えた。

それからわずか二年後、慶長五年九月十五日に関ヶ原合戦が起こり、徳川家康率いる東軍が石田三成らの西軍相手に大勝した。

家康は慶長八年二月十二日に征夷大將軍に任ぜられて、幕府を開く。豊臣と徳川の最終決戦となった慶長二十年（二〇元和元年）五月の大坂夏の陣で徳川方が勝利し、大坂城は落城。五月八日に豊臣秀頼と母淀殿が自害して、豊臣家は滅亡した。

元和二年（二一六）、徳川幕府は京都・伏見と大坂を結ぶ「京街道」に伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の四つの宿駅を置いた。

幕府は、東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中を主要街道と位置付け、幕府直轄とし、これらは「五街道」と呼ばれた。中でも江戸と上方を結ぶ東海道は最も重要な街道とされ、一五〇前後の大名が参勤交代に利用し、京都・大坂・長崎と江戸を往来する幕臣や多くの庶民も盛んに通行した。

その東海道は、浮世絵師歌川（安藤）広重の「東海道五拾三次」でも知られるように、一般には、江戸の日本橋を起点、京都の三条大橋を終点とし、間に五十三の宿駅が存在したと認識されている。しかし幕府は、大津宿から山科の髭茶屋追分で三条に向かうルートと分岐し、京街道の伏見宿、淀宿、枚方宿、守口宿を経て、大坂

の京橋に至るルートも「東海道」として把握した。

但し、この京街道に沿っては、淀川を航行する三十石船が伏見と大坂の八軒家を結んでおり、伏見から八軒家へと向かう下りについては、多くの旅人が楽で安価な三十石船を利用した。伏見と八軒家を結ぶ淀川舟運は川の京街道、川の東海道とも呼ぶべきルートであった。

〈参考文献〉

「東海道枚方宿と淀川」

「東海道」枚方宿」(『大阪春秋』六六)

「枚方宿と船宿」鍵屋」(『大阪春秋』八三)

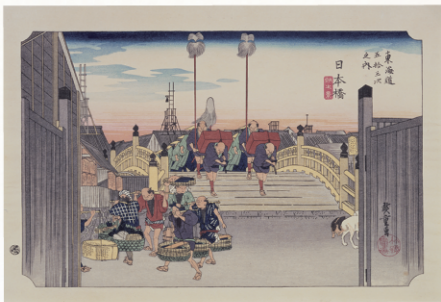
中島三佳著

中島三佳著

中島三佳著

日本橋

歌川広重画



東海道



城南宮

城南宮は平安遷都の際に創建された神社で国常立尊・八千矛神(大国主命)・息長帯日売尊(神功皇后)を祭神とし、方除の信仰で知られる。平安時代後期、白河上皇が造営した「鳥羽離宮」の鎮守社で、「鳥羽離宮」は熊野詣を行なう貴族たちの精進所や方達の宿所となり、出立時「鳥羽の津」から舟に乗り淀川を下った。毎年四月二十九日と十一月三日に催される「曲水の宴」は平安時代の雅な歌会を今に伝え、京都を代表する年中行事の一つになっている。



枚方・守口

京阪電鉄の枚方市駅と枚方公園駅の間が概ね「枚方宿」で、問屋役人を務めた旧小南邸・小野邸や船宿「鍵屋」などが枚方宿の繁栄ぶりを今に伝える。豊臣時代の創業と伝える「鍵屋」は、現在「枚方宿鍵屋資料館」として公開され、枚方宿関係の史料などを展示する。一方、京阪電鉄の守口市駅前には秀吉が築かせた「文禄堤」が残り、その上を「京街道」が通る。江戸時代以来の旧家がかつての「守口」を偲ばせる。



写真提供: 枚方市教育委員会

八軒家

八軒家は天満橋と天神橋の中間南岸に位置し、江戸時代には伏見と大坂を結ぶ三十石船の発着港として賑わった。三十石船は下りの伏見へ八軒家を半日、上りの八軒家へ伏見を丸一日で結んだ。明治に入ると、外輪船（蒸気船）が就航し、所要時間も大幅に短縮されたが、鉄道の開通により、淀川舟運の需要は大きく減退し、八軒家も衰退した。八軒家船着き場跡は昭和三十八年に大阪市顕彰史跡に指定された。



四天王寺 熊野権現礼拝石

四天王寺は飛鳥時代の推古天皇元年（五九三）に聖徳太子が創建した日本最古の官寺として知られ、南大門・中門・五重塔・金堂・講堂が南北直線上に並び伽藍配置は「四天王寺式伽藍配置」と呼ばれる。平安時代後期以降、西門の石鳥居が極楽の東門として信仰されるようになるが、その石鳥居の西側を熊野街道が通る。「熊野権現礼拝石」は南大門に入ったところであり、多くの人々がここから遥か彼方の熊野三山を遥拝した。





道中膝栗毛

ひびくりげ
十返舎一九

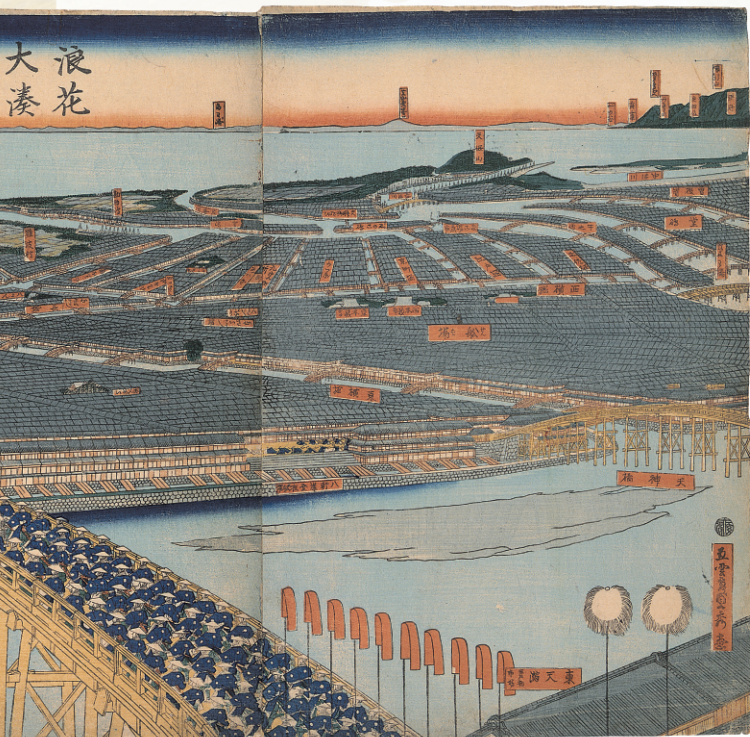
押照るや難波ななわの津は、海内秀異の大都会にして、諸国の賈船こせん、木津・安治の西川口にみよしをならべ、碇いかりをつらねて、ここにもろもろの荷物をひさぎ、繁昌の地いふばかりなし。ことさら花の春は淀川に棹さしして桜の宮にあそび、網島の鮒卵ふなうに酔をもよほし、夏は難波新地の納涼に螢をかり、豆茶屋に腹をこやし、秋は浮む瀬の月、冬は解船とほふね町の雪げしき、四季折々の詠め多かる中に、目枯れぬ花の廓くわ中はいつも盛りの春のごとく賑はひ、道頓堀の芝居はつねも顔見世の心地して群集絶えず。かかる名誉の地を見のこすも本意なしとて、かの弥次郎兵衛・北八なるもの、伏見の昼舟に途中より飛び乗りて、はやくも大坂の八軒家やちげんかにいたり、ここより船をあがりたるは最早たそがれ時にして、東西をしらず南北をわきまへざれば、人に尋ねとひつつ、長町をさしてゆくほどに、堺筋通を南に日本橋へ出でたりければ、宿引きどもここに居合はせ、兩人を見かけて宿の相談をしかくるに、早速きはまり、すぐさまこの長町の七丁目なる分銅河内屋といふにぞつれゆきける。

『道中膝栗毛』第八編、弥次郎兵衛と北八の二人が八軒家やちげんかに上陸して日本橋筋の分銅河内屋に宿をとり、これから大坂を見物しようとするその序文の一節。十返舎一九が文化六年（西紀一八〇九）に発表したものである。

淀川三十石船の図 歌川広重画

枚方のあたりで物売りのくらわんか舟が寄って、餅・牛蒡汁・酒など売付けている。





永田屋本店蔵

浪花大湊一覽

この「風景版画」は、江戸時代末期の絵師・歌川貞秀の絵で、天満より大坂城、上町船場、島の内をはじめとした浪花のまちを眺望した貴重な作品である。画面手前に大名行列が渡る天満橋の賑わいが描かれ、その右手に天神橋、間の向こう岸に八軒家船着場が描かれている。



八軒家船着場跡碑
(大阪市顕彰史跡)



大阪城

豊臣秀吉が天下統一の拠点として築いた大阪城は、慶長20年(1615)5月7日、大坂夏の陣で落城しましたが、徳川幕府の二代将軍秀忠が大坂城の再築を命じます。今も残る石垣や堀、櫓・門・堀など古建造物は全てこの徳川大阪城のものです。

現在の天守閣は昭和6年(1931)全額大阪市民の寄付金で復興されたもので、大坂夏の陣図屏風(大阪城天守閣蔵、重要文化財)に描かれた豊臣秀吉築造の天守閣をモデルにしています。



天満ばし風景 歌川國貞画

「浪花百景」より

天満橋から大坂城の北側を右手に生駒山系を望んだ景。天満橋はもと、少し上流の谷町筋(京橋二丁目目の間)から天満橋筋二丁目目の間に架けられていたが、明治二十二年(一八八八年)には現在の位置に改架された。築地を挟んで左側が大川、右側が寝屋川。



天満橋八軒家は、平安時代より鎌倉時代にかけて皇族、貴族の紀州熊野本宮への参詣道(熊野街道)の起点として賑わいました。江戸時代は、八軒の船宿が軒を並べ、京、大阪を上り下りする三十石船の往来激しい浪花名所のひとつでした。森の石松が金刀比羅参りの帰り、「江戸っ子だつてねえ、寿司食いねえ」と笑わせたのはこの船の中ということになっています。

明治から平成と近代化が進み現在では、京阪電車と、地下鉄谷町線が交叉して、昔を偲ばせる三十石船は、現在ではアクアライナー(水上バス)として就航し、賑やかなターミナルの役目は今も



大川左岸が今の八軒家浜(2018年)
(天満橋より天神橋方面を望む)

変わりません。

大川沿いは緑に囲まれ、隣接する中之島・北浜・ビジネスパーク・大阪城界限などは、数多くの史蹟をはじめ、ホテル・官庁街等新旧をあわせた見どころがいっぱいです。

また、天満橋では商業施設が充実するなどの再開発が進んでおり、水都・大阪再生への取り組みのひとつとして注目されています。

摂州 天満橋 葛飾北斎画

「諸国名橋奇覧」より

八軒家の辺りから眺めた天満橋が、天神祭りの灯りで飾られ、江戸時代末期の木橋の優美な姿を伝える、富嶽三十六景で有名な北斎による風景版画です。



参考文献

- 「大阪平野のおいたち」……………梶山彦太郎・市原実著
- 「クラと古代王権」……………直木孝次郎編 栄原永邁男著
- 「古熊野をたずねて」……………神坂次郎著
- 「日本の原郷・熊野」……………梅原猛著
- 「熊野古道」……………横田健一他著
- 「別冊太陽 熊野」……………

監修：牧村史陽 北川央

企画・制作：大日本印刷（株）

本書では、現在の地名の場合は「八軒家」、昔の地名の場合は「八軒屋」と表記しています。作品の解説に関しては現在の地名で表記しています。

本書の収録内容の転載・複写・引用などを禁じます。



永田屋本店蔵

八軒家船着場 野村廣太郎 画

創業明治六年(西曆1873年)

永田屋昆布本店

大阪市中央区天満橋京町2-10 (非売品)

